

対談

地域医療の文脈における災害対応

東日本大震災時、南三陸町公立志津川病院に勤務していた菅野武先生は、患者さんと共に被災。その後、自治医科大学同窓会支援チームの支援を受け同町の災害医療体制構築に関わり、米国 TIME 誌の「世界で最も影響力のある 100 人」に選出されました。2024 年 1 月に発生した能登半島地震においても、自治医大同窓会支援チームの立ち上げ、事務局を担当し、受援体制構築と被災地内医療機関の疲弊を防ぐ取り組みを主導しました。

その経験を経て、いま改めて「災害医療」を考える特集を企画し、巻頭の対談では、災害時の保健・医療・福祉活動の研究を手掛ける尾島俊之先生と「地域医療の文脈における災害対応」をテーマにビジョンを共有しました。



尾島俊之先生

浜松医科大学医学部 健康社会医学講座 教授

菅野 武先生

自治医科大学医学教育センター
医療人キャリア教育開発部門 特命教授
東北大学大学院医学系研究科 消化器病態学分野 准教授

縁に導かれ、 公衆衛生・疫学の道へ

菅野 武 今月の『月刊地域医学』は「災害医療アップデート -支援団体の多様性を学ぼう-」を特集します。そこで今日は、災害医療の研究の第一人者である尾島俊之先生と、「地域医療の文脈にお

ける災害対応」というテーマでお話ししたいと思います。

本題に入る前に、先生は自治医科大学の卒業生ですので、まず、自治医大入学から今に至るまでの経緯を簡単にお聞かせいただけますか。

尾島俊之 高校生の頃の私は「農村でゆっくり暮らしたい」と思っていました。ただ、いきなり農村に行っても受け入れてもらえないだろうと思

い、自治医大に入れば医者として農村に行けるのではないかと、受験を決めました。入学当時はちょうどパソコンが普及し始めた頃で、公衆衛生学教室には最新型のものがあり、教室に入ると使わせてもらえたのですね。それで公衆衛生学教室に出入りするようになり、5・6年生の時には国家試験対策の勉強会などで使わせてもらっていました。

卒業後は、まずどんな患者さんにも対応できる力をつけたいと、名古屋掖済会病院で初期研修を受けました。当時は特に災害医療を意識していたわけではありませんが、掖済会病院は現在、災害医療の先進病院として有名になっています。そういう環境で学べたのは幸運だったと思います。その後は愛知県の国民健康保険東栄病院に勤務しました。この地域には、自治医大初代公衆衛生学教授の柳沢利喜雄先生が、前任の千葉大学公衆衛生学教授時代に農山村医学研究施設を設置して、静岡県佐久間病院、長野県立阿南病院、東栄病院の連携により広域な地域医療を展開された歴史があります。その名残りで、東栄病院に公衆衛生科という部門がありました。私は、内科医として勤務するとともに、その公衆衛生科にも所属して、東栄町の保健師さんや検査部門の方と一緒に健診システムの開発を担当しました。

その後、県から保健所勤務をしないかというお話があり、それまでの公衆衛生とのつながりが活かせると考えて、国立公衆衛生院(現 国立保健医療科学院)で1年間研修してから愛知県の設楽保健所で保健所長を務めました。この保健所は以前の勤務先である東栄町も管轄しており、共に地域の健康づくりや教育に取り組みました。義務年限中の若い時期に保健所長を経験できたことは非常に有意義でしたし、感謝しています。

義務年限終了後は自治医科大学公衆衛生学教室の柳川洋先生に呼ばれて大学に戻りました。

その後、教授となった中村好一先生の勧めで浜松医科大学の公募に応募、2006年、浜松医科大学健康社会医学講座に赴任しました。

浜松医大に着任すると、厚生労働省から今後必要となる研究テーマのアイデアを求められたので「災害時のボランティア活動が重要ではないか」と提案したところ、これが採用されて研究班が立ち上がりました。ちょうど研究開始の年、2007(平成19)年に能登半島地震が発生したことから、それを契機に本格的に災害保健医療に関する研究を始めることになりました。

災害保健医療関連の研究については後ほどお話しますが、公衆衛生関連では「JAGES(Japan Gerontological Evaluation Study) - 日本老年学的評価研究」に長年携わってきましたが、中心となっていた近藤克則先生に代わり、現在は私がJAGES機構の代表理事を務めています。また、「健康格差対策の7原則」の作成に関わり、「第3期データヘルス計画策定の手引き」作成の検討会座長を務め、この手引きの中には危機管理用語である戦略なども入れ込みました。

出版物関係では『疫学の辞典』の編集および災害疫学に関する章の執筆、『公衆衛生がみえる2024-2025』の監修、同期の國井修先生と一緒に「みんなで取り組む 災害時の保健・医療・福祉活動」を編集・執筆するなど、疫学・公衆衛生学プラス災害保健医療という視点での監修・執筆の機会も増えています。

災害医療を俯瞰でとらえる

菅野 臨床と公衆衛生のバックグラウンドを持ちながら大学で新たな方向性を模索されていた中で「災害」というテーマに出会い、現在の活動につながっているのですね。

尾島 そうですね。特にいま最も力を入れているの